



Book Review 「ヘイト」が突きつけるリベラル・デモクラシーの矛盾と困難[「差別はいけない」とみんないうけれど。 綿野恵太・著, 左派ポピュリズムのために シャンタル・ムフ・著 山本圭・塩田潤・訳]

梶谷, 懐

(Citation)

外交, 57:138-141

(Issue Date)

2019-09

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

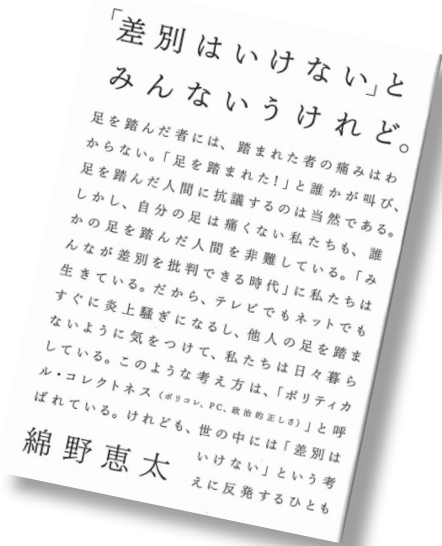
(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006570>



【選評】

神戸大学教授
梶谷懐



「差別はいけない」とみんないうけれど。

綿野恵太・著

平凡社 / 2019年7月 / 2200円+税

「ヘイト」が突きつける リベラル・デモクラシーの矛盾と困難

リベラルなデモクラシー。冷戦が終わって「勝利」したかに見える「普遍的価値」が、今、世界のあちこちで

しみをを見せているようにみえる。しかし、そのような「普遍的価値」の揺らぎは、そもそもリベラリズムとデモク

ラシーという異質な原理に立つ価値観が内包していた根本的な矛盾にその原因があるのかもしれない。

それをいち早く指摘したのが、政治学者のカール・シュミットである。シュミットによれば、リベラリズムは普遍性に立脚しつつ個人の多様性を求める思想であり、デモクラシーは「私たち／彼ら」というフロンティアの構築を通じて同質的な「人民」を作り上げようとする思想だが、これら二つの原理は互いに矛盾し合う。したがってこの相容れない思想が結合したリベラル・デモクラシーとは、本来不可能な体制なのだ、と。

緊張をはらんだ補完的關係

もつとも、このシュミットの主張に對しては、シヤンタル・ムフがその著書『左派ポピュリズムのために』で行ったような批判がある。

ムフは、リベラリズムとデモクラシーとの緊張関係を認めつつも、その緊張関係こそが、現実を変革していく力になるのだという。曰く、「私はこれらの伝統の節合——じっさいのところ究極的には相解しえない節合——を一箇の逆説的な構成^{コンストラクション}体であると捉えた。つまり、それは緊張の場であり、この緊張が、多元主義的な性格を保障する政体^{ポリティック}、ないし政治共同体の一形態として、自由民主主義の獨創性を定めている」と(同書、二九頁)。

同質的な人民による「分配の平等」を要求するデモクラシーは、その内部に「排除」の原理を内包する、危険なものでもある。しかし、ともすれば資本のロジックに支配されがちなりベラリズムを、より普遍的・包摂的なものにしていくためにデモクラシーは必要不可欠であり、リベラリストは「警戒しつつその原理を導入すべき」だ、と

いうのがムフの主張ということになるだろう。

ポリティカル・コレクティブネスの隘路

しかし、ムフの見解は楽観的にすぎないだろうか。少なくとも、私たちに身近な東アジアの状況を見る限り、リベラリズムとデモクラシー、すなわち「自由主義的な個人意識と民主主義的同質性」の相克は、もはや容易に調停できそうにない、厳しい状況に置かれているように思える。

シユミットの問題提起から出発しながら、現代日本社会の直面する固有の困難さを論じているのが、新進気鋭の批評家、綿野恵太による初の単著『差別はいけな』とみんないうけれど。』である。

綿野は、本書においてデモクラシーとリベラリズムの相克について正面から論じるといふより、「差別はいけな

い」という言説、すなわちポリティカル・コレクティブネスをめぐるシチズンシップとアイデンティティ・ポリティクスという二つの立場の対立に焦点をあてる。それはとりもなおさず、近年の日本において、在日朝鮮人などマイノリティへの「ヘイトスピーチ」をめぐる言論状況に、リベラリズムとデモクラシーの対立が最も先鋭的にあらわれているからにほかならない。

綿野によれば、同じ「差別はいけな」という主張でも、「足を踏まれたものの痛みは踏まれたものにしかかわからない」というアイデンティティ・ポリティクスに基づく主張は、同質性を重視するデモクラシーに立脚している。それに対し「足を踏まれたものの痛みに共感したものは、だれでも足を踏んだものを告発できる」というシチズンシップの主張は、普遍性を重視するリベラリズムに立脚している。

マイノリティへの差別、およびそれをめぐるポリティカル・コレクトネスの問題が厄介なのは、当初、差別への告発がマイノリティによるアイデンティティ・ポリティクスとして行われるのに対し、それに対してマジヨリティの側も「自分たちの尊厳が貶められた」として、アイデンティティを前面に押し出しながらポリティカル・コレクトネスを批判する、という構図があるからだ。

では、アイデンティティ・ポリティクスの「同質性からくる排他性」を批判する、シチズンシップ（リベラリズム）による差別の克服に期待すればよいのだろうか。それも現実には難しい、と綿野はいう。

その理由の一つが、シチズンシップの思想が、「上流階級の思想」「お高くとまった理想主義」とみなされ、大衆から乖離してしまいがちな点だ。これ

は、シチズンシップは、そもそも集団としての同質性をもたらす「根拠性」「当事者性」とは相性が悪いために、常にその差別問題へのコミットメントの「軽さ」が問われるという側面があるためだ。

それを象徴するのが、しばしば特定の著名人による「ヘイトスピーチ」が行われ、それがネット上で炎上する、という半ばパターン化された現象である。つまり、ヘイトスピーチに対するネット上の「炎上」は、リベラルな市民が公共のルールを守らないものを集団で制裁し、その同質性を確認するための単なる「儀式」になってしまっているのではないか、というわけだ。

もう一つの理由は、科学的なエビデンスと功利主義的な価値判断に支えられた「合理的な差別」を肯定する思想が急速に広がりを見せている点である。それは、「踏まれた足の痛み」、す

なわちマイノリティのアイデンティティ・ポリティクスを支えるエモーショナルな共感を「科学的なエビデンスに乏しい」として根本から否定するという側面を持つ。もちろん、このような合理的・功利主義的な姿勢は、不合理な差別を批判するシチズンシップとも結びつきうる。しかし、それはやがて、「リスクを科学的に測定し、問題や対立を除去する」管理社会的な統治思想と結びついてしまうのではないかと、綿野は警鐘を鳴らす。

香港デモが露呈させた根本的矛盾

さて、二〇一九年九月現在、香港では「逃亡者条例」への批判に端を発した大規模なデモ、および若者たちによる過激な抗議活動や警官隊との激しい対立が続いている。今のところ解決の糸口は見つかっていない。筆者は、この香港をめぐる問題にも、本書が説く

ようなアイデンティティ・ポリテイクスとシチズンシップとの矛盾が大きく影を落としている、と考えている。

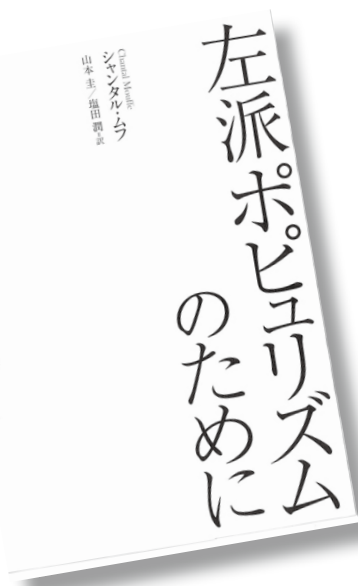
いうまでもなく、香港市民のデモや政府への抗議活動は市民の自由な活動が奪われることへの反発から行われたものだ。この意味では香港の運動は普遍性を重視するリベラリズムに立脚するものであり、言論の自由に代表される普遍的な価値にコミットする国際社会の市民もこれを支持すべきだ、ということになる。

しかし、実際に大規模なデモや、激しい抗議運動の凝集力となっているのは、明らかに香港市民による、中国本土の人びとに対するアイデンティティ・ポリテイクスである。このため、過激な行動に走る若者たちの言動はしばしば本土の人びとに対して差別的なものとなり、市街のいたるところにはヘイトスピーチと表現するしかない、

つまりシチズンシップとは決して相容れないような落書きがあふれることになる。

本書の指摘を踏まえるならば、リベラリズムとデモクラシーの間に存在する根本的な矛盾に、何とか折り合いを

つけるような解決策を見出さない限り、現在の香港をめぐる混乱を収束させることは難しいのではないだろうか。本書は、そのような厳しい現実に向き合うための思考のツールを提供してくれる好著である。●



左派ポピュリズムのために

シャンタル・ムフ・著
山本圭・塩田潤・訳

明石書店 / 2019年1月 / 2400円+税